

CHOSHI（第6話）

5年生の藤本がピッチャーになって、興野小はいい試合をするようになった。そして、6年生の春の大会、興野小は勝ち進み、準決勝で明神小と対戦した。

明神小のエースはこの代の銚子No.1ピッチャーと言われていた芝野。キャッチャーは鉄砲肩の小知和。芝野と小知和は銚子No.1のバッテリーだった。

試合は、芝野と藤本の投手戦になった。最終回まで0-0。しかし、興野小には中居というスラッガーがいた。

最終回、ランナーをおいて、ついに中居は芝野の球をとらえた。そして打球はレフトオーバーのサヨナラヒットになった。

翌日の決勝の相手は清水小。球場は満員だった。興野小が決勝に行くことは初めてだったので、町内中の人達が仕事を休みにして、応援に来た。一方、清水小も銚子の小学校の盟主として、興野小には負けられない。銚子市野球場は小学生の大会とは思えないほどの熱気につつまれていた。

清水小は強かった。1番の関根はどんな球でもバットに当てることができる天才打者でこの大会の打率は7割を超えていた。そして4番は体ががっしりし銚子No.1スラッガーの藤原がいた。関根と藤原は藤本の球をとらえた。

興野小も打ち返したが、試合は6対3で清水小が勝った。この試合で藤本は点をとられたが、興野小は守備を鍛え、また藤本もさらに制球をみがき、6年生最後の秋の市内大会では興野小が優勝した。藤本は名実共に、この世代の銚子のエースになった。

中学生になると、清水小と明神小の生徒は銚子一中に、興野小の生徒は銚子四中に入学した。野球の強い2校から生徒が入学する銚子一中は、銚子の中学校の大会で常に優勝する強豪校だった。他にも銚子市野球場のすぐ横にある銚子三中や犬吠埼にある銚子二中が強かった。商店街の子供達が多い、銚子四中はこれらの中学校にいつも負けていた。

藤本が入学すると、銚子四中の校長先生が話しかけてきた。『君が藤本君か。確かにいい体をしておる。ただ中学生になったらさらに体を鍛える必要がある。しっかり食べて、怪我なく練習に励むように。』

藤本は体育が得意だった。ある日の体育は跳び箱だった。藤本が跳ぼうとすると、体育の先生が止めに入った。『藤本君。校長から君が怪我する可能性がある競技はやらせないように言われている。みんなが跳び箱を跳んでいる間は、校庭を走ってもらえないかな。』藤本は野球に専念できるよう、色々なことが特別扱いされた。